

## アメリカの古層……藤本龍児



森本あんり著  
『アメリカ的理念の身体  
寛容と良心・政教分離・  
信教の自由をめぐる  
歴史の実験の軌跡』  
創文社／2012年12月刊

妹は、兄トクヴィルの描いたアメリカ像を大きく修正する「寛書」を残した。本書は、アメリカ論の古典中の古典「アメリカのデモクラシー」を書いたアレクシス・ド・トクヴィルの「妹」の存在から説き起こされている。

この冒頭からもわかるように本書は、一般的なアメリカ像とは違った「もう一つの実像」を明らかにするものにほかならない。それは、著者の長年にわたる歴史神学の研究の土台のうえに、近年の政治哲学の成果を交えることで達成されている。寛容、良心、平等、自由などを核とした「アメリカ的理念」が、それらを体現した人物、制度、法律などの「身体」との関わりで歴史的に検証され、哲学的に考察されている。

ニューイングランドにおける多層的な宗教の在り様をはじめ、「偽れる良心」「悪行権」「厳格な政教分離の袋小路」「反知性主義の由来」「筋肉質のキリスト教」など、面白い論点がたっぷり盛り込まれていて興味が尽きない。

日本では、宗教的な観点からアメリカを理解する研究が「周回遅れ」になっている。しかし、だからこそ本書では、まず「標準理論」が提示され、そのうえで現在整備中の「修正理論」が検討されている。おかげで、最新の研究書でありながら、この領域に不慣れな読者にも近づきやすい内容となっているのが有り難い。

例として「寛容」について見てみよう。一般的

な通念とは異なり、寛容の理念が形成されたのは、キリスト教の強固な支配が見られたヨーロッパ中世においてであった。信仰は自由意志に基づくべきものであって、信仰の無理強いはより大きな悪をもたらす。そう考えた中世の人々は、教会の周縁部に「異教徒」がいることを容認したのである。ただし、社会の中心部に「異端者」がいることは認めなかった。社会の中で異端者を自由にさせれば、信仰理解とともに社会秩序を崩しかねないからである。

中世的な寛容は、現代の寛容と違い、徳でも善でもなかった。寛容は「中心的な価値」を維持しながらも、社会の中に他者を位置づける伶俐な知恵であった。初期アメリカでも、こうした「寛容」をもとに社会が形成されたのである。

ここでは「中世なき近代」と言われるアメリカ理解が訂正され、単なるスローガンで終わりがけない現代の「寛容」概念に、実践的な知恵の古層があることが明らかにされている。

もちろん、それだけで問題が解決されるわけではない。もし社会の「中心的な価値」が現代的な自由や民主主義であるならば、ムスリムの存在はどうなるのか。そもそも、そのように世俗的な価値を中心とする近代社会自体に限界がきているのではないか、などの疑問は残る。しかし、そうした根本的な問題を考えるうえでも、本書は実に多くの手がかりを与えてくれる。